愛知県都市部における産育にまつわる儀礼と信仰の現状

――熱田神宮の事例を中心に

ムカルジー・ヒヤ *

KeyWords
安産祈願
愛知県名古屋市
熱田神宮
都市部
産育儀礼の実態と動向

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　先行研究と問題提起
　1. 安産祈願に関する先行研究
　2. 出産と穢れ観
　3. 調査地域と対象事例
　4. 本研究の目的
Ⅲ　熱田神宮の事例――安産祈願の習俗
Ⅳ　熱田神宮における腹帯の習俗
Ⅴ　熱田神宮における初宮参りと命名式の習俗
Ⅵ　考察
Ⅶ　結論と今後の課題

Ⅰ はじめに

日本では、地域により産育儀礼のあり方には多様性が認められるが、これら出産に関わる民間信仰や言い伝えは時代のなかで変化してきている。現在では、生活様式の変化によって病院出産が一般的になり、それらにともなって産育儀礼も変わりつつある。また、時代の変遷や祈願者の願いにより、もとは産育儀礼とは直接的な関係がなかった神社仏閣が、近年になって安産祈願や他の産育儀礼のご利益を与える場所として見なされ、多くの参拝者が参詣するようになった事例が相当数ある。そのようななかで、近年では、都市部における神社・仏閣が産育儀礼とどのように関わっているのか、その実態と動向を論じた研究もみられるようになった。

本稿は、都市部における産育儀礼である安産祈願・腹帯・命名式・初宮参りなどの実態と動向を再考察するために、産育儀礼をおこなう神社として人気の高いものの一つである、愛知県名古屋市の熱田神宮の事例に注目し、現在の視点から産育儀礼の実態とともに動向を報告することを目的としている。熱田神宮にはさまざまな神社が合祀されている。安産祈願・腹帯・初宮参り・命名式などのような儀礼ごとに、熱田神宮境内にある末社や摂社のうち、どの社が、どのような理由によって参詣されているのか、そして赤子の安産とその健やかな健康祈願にいかに関連づけられているのかを検討する。そして、熱田神宮の事例を取り上げることにより、これまでになされた安産祈願に関する先行研究と比較検討しながら、どの点が共通しているのか、どの点に相違があるのかを報告し、産育儀礼の実態並びに動向を明らかにするものである。

Ⅱ 先行研究と問題提起

1. 安産祈願に関する先行研究

* 名古屋大学大学院人文学研究科

日本民俗学並びに文化人類学において、出産及び産育儀礼に関連する先行研究は相応に蓄積されてきた。産育儀礼としては、主に安産祈願[1]・腹帯祝い[2]・初宮参り[3]・七夜・命名式・初誕生などがあげられ、それぞれの習俗を神社・仏閣との関連において考察した先行研究が蓄積されてきたが、その現代的展開に注目した研究もあらわれている。例えば、現代の安産祈願を論じた田口祐子は、「安産祈願の実態と動向――新宿区中井の御霊神社の事例から」という論文において、東京都新宿区中井の御霊神社の事例を取り上げ、1936 年から戦前までに新宿区の出生数が急激に増加したことを示した。その間、安産祈願や安産のお守り～参拝者が増えたが、戦後は、少子化・子供の数の減少とともに人の移動や入れ替わりの激しさ及び以前より続いていた核家族の傾向により、安産祈願や安産のお守りを受けるために御霊神社を訪れた参拝者の事例が減少したことを明らかにした（田口 2010: 100-110）。また田口は、別の論文「現代における安産祈願の実態とその背景」において、東京都内の八カ所の神社の事例を取り上げ、特に水天宮という特定の神社への参拝者の集中化が進んでいる傾向を指摘し、その理由として、主に現代日本の妊婦が安産祈願の情報を得るために参照している育児雑誌の記事やインターネットサイトの情報がもたらす影響の大きさを指摘している（田口 2011: 107-129）。

田口の研究は、現代の安産祈願の実践における育児雑誌とインターネットサイトなどのメディアの影響の大きさを明らかにしただけでなく、明治・大正時代までに別々になされていた「安産祈願」と「腹帯祝い」という二つの産育儀礼が一つにまとめられるようになりつつあることを明らかにした点で興味深い。その一方で、妊婦の数の増減については安産祈願の際に妊婦に授与される安産守授与薄の検討にとどまっている他、御霊神社の歴史、この神社が安産祈願の対象となった経緯、祀られる祭神がなぜ安産の神として信仰を集めているのか、安産祈願の際の習俗などについては十分に論じられているとはいいがたい。また、これらの情報とメディアの関係についても、より詳細な検討が必要と考える。

安産祈願と信仰の関係については、例えば内藤美奈が、「対馬の産育習俗（1）右近様――厳原町の安産祈願」において、長崎県下県郡厳原町の安産祈願と深く関連のある曹洞宗の仏閣である成相寺の事例を取り上げている。「右近様」は安産の神とされるが、「オコンサマ」及び「ウコンサマ」とも呼ばれる。出産の際、本来は解かなければならなかった腹帯を締めたままにしたために、赤子を産むことができなかった女性が、後に「右近様」になり、妊婦に安産のご利益を与えているとされる。参拝者は、最も危険な時期とされる妊娠 4 カ月頃、妊婦が腹帯にする白い晒し一巻きを長いまま巻いて、この仏閣を訪れて安産祈願をおこなうという（内藤 1998: 39-48）。内藤は、別の論文「対馬の産育習俗（2）八幡宮神社の腹帯祝いと初参り」において、対馬の八幡宮神社の事例を取り上げ、もともとは武勇・戦勝を祈願する場所として人気を集めてきた八幡宮神社の祭神が、以前は出産を赤不浄[4]として嫌うとされていた。そのため、安産祈願とともに初宮参りの際に妊婦や母親の参拝が禁じられ、安産の祈祷をおこなうためには、本神社の宮司が妊婦の家庭を訪れたり、初宮参りの際には産の穢れ[5]のために、赤子の母親の代わりに父方の祖母が赤子を抱きながら右回りに本殿を三周したりする習俗があったものの、現在では、産の穢れの意味合いが消失したことを報告している。例えば、現在では、他の神社と同様、妊娠 5 カ月目の戌の日に、妊婦が安産の祈祷を受けるため八幡宮神社を訪れること、無事に出産した女性が初宮参りの際にも赤子を連れて参拝するようになっていること、腹帯として白い色の晒しよりもパンツ型の衣類が腹帯の代表品になってきたことなどを指摘している（内藤 1999: 93-99）。

内藤の研究は、現代における安産祈願の信仰的側面、宗教的背景に迫ったものであり、本稿の問題意識とも共通する。また、時代の変遷と祈願者の考え方の変化によって、

1　安産祈願とは、日本では女性が妊娠したら、胎児の安産を願って神仏に祈願することを意味する。出産で妊婦や新生児が命を落とす可能性が高いため、神仏への祈願を捧げることは当然の習俗になってきた。安産祈願の対象には、地域ごとの氏神や子安観音、子安地蔵、さまざまな神がご利益を与えてくれると信じられている。

2　腹帯祝いとは、妊娠 5 カ月頃の妊婦がお腹に腹帯を巻き、お腹の胎児を安定させる意味を表す。腹帯の祝いは、安産祈願の儀礼の一種になっており、犬が多産で無事に数多くの子犬を産むことができることより、戌の日に帯を締める事例が多い。地方や社寺により「腹帯」の呼び名が異なり、昔から日本では、妊婦が白や赤の木綿で作られた伝統的な晒しを巻く習俗があったが、現在、晒し以外に、コルセット・マタニティベルト・腹巻タイプのものも使われる。

3　初宮参りとは、産後の産育儀礼の一つであり、赤子の健やかな成長を願い、氏神に赤子が無事に生まれたことを報告することを目的としている。男の子なら産後の三十二日に、女の子なら産後の三十三日に、初めて神社に参拝する例が多い。初宮参りの儀礼をおこなうことで、氏神に赤子の存在を認めてもらい、神からの加護や祝福を頼む意味合いが含まれる。

4　赤不浄とは、産の穢れや月経の穢れのことを意味する。

5　産の穢れとは、主として出産に関する血の穢れのことを意味し、「赤不浄」とも呼ばれる。地域により、出産した女性が神棚に近づくことはできす、赤子の初宮参りの儀礼にも参加することはできないこともある。

安産祈願や他の産育儀礼である初宮参りの習俗が変容していること、現代では産の穢れ観もなくなりつつあるという重要な点も指摘されている。ただし、扱われている事例がいずれも長崎県対馬という特定の地域を対象としたものであるため、これらの傾向が他の地域、特に都市部でもみられるのかどうかという点については、さらなる検討が必要と考える。

安産祈願に関連する習慣、儀礼の現代的変化については、他地域の事例も報告されている。例えば中島恵美子は、「多摩川流域の安産祈願」という論文において、長崎県の多摩川流域の上流地区の尾崎観音、中流地区の東光寺安産薬師と大国魂神社、下流地区の大本山川崎大師平間寺などの事例から、これらの社寺がもとは厄除けのご利益を与える場所として見なされてきたが、時代の変遷や祈願者の願いにより、今日では安産の祈祷もなされるようになったと報告している。ただし、安産の祈祷のために、特定の決まった方法があるわけではないという。妊婦は、戌の日に護摩を焚いてもらうが、自分自身で腹帯用の晒しを準備して持っていかなければならない（中島 1993: 24-26）。同様に、福尾美夜は「安産祈願及びコンガラ様」という論文において、腹帯祝いとヘイシ除け[6]の祈祷に深く関連する岡山県瀬戸内市牛窓町の紺浦エリアの事例を取り上げ、祭神の「コンガラ様」[7]が参拝者により「オシメサマ」と呼ばれ、乳児の死亡率が高かった大正時代、「コンガラ様」に対してヘイシ除けの祈祷とともに赤子の無事な出産の祈祷がなされていたが、非常に医学技術が進歩した平成時代においても、「コンガラ様」から、ヘイシ除け及び安産のご利益を受けるために相変わらず参拝者が瀬戸内市牛窓町の紺浦エリアを訪れていることを明らかにしている（福尾 1994: 1-8）。

以上のように、安産祈願に関連する習慣と儀礼の今日的状況は地域によって多様であるが、安産祈願にともなう祈りの論理と信仰の内実については一定の継続性も認められる。それでは、安産祈願や他の産育儀礼をおこなうために、妊婦がある特定の神社仏閣を訪れている理由はどのようなものだろうか。従来は安産祈願とは何の関係も有していなかった神社仏閣が、新たに安産祈願の場となっている事例もこれまでにいくつか報告されているが、こうした状況は、安産祈願と信仰という観点からどのように解釈できるだろうか。また、これらは都市部と村落部でも共通した傾向を示すのだろうか。あるいは、都市部と村落部で事情は異なるのであろうか。本稿は、以上の問題意識を持ちつつ、名古屋市における安産祈願に深く関連する神社の事例を取り上げながら、現代における安産祈願の信仰的側面、宗教的背景の一端に迫ってみたい。

2. 出産と穢れ観

出産をめぐる伝統的な習慣や儀礼の多くは、穢れ観と密接に結びついていた。出産をめぐる民俗的な穢れ観は、女性の神社仏閣への参詣の時期や可否などの条件に一定の影響を及ぼしてきた。このような穢れ観については、日本民俗学の分野でしばしば取り上げられてきた。ただし、出産をめぐる環境と生活様式の変化にともない、こうした穢れ観にも変化が生じてきていることも見逃せない。例えば、新谷・波平により編集された『暮らしの中の民俗学③一生』によれば、時代の変遷にともない、自宅出産から病院出産への移行や医学技術が進歩することにより、出産にみられた「産の忌」や「ケガレ」の概念が重視されなくなってきたこと、穢れの意味も、かつてのような共同体コスモロジーによる語りよりも医学的な見地からの語りが主流となるなかで大きく変わりつつあることが指摘されている（新谷他（編）2003）。先述の内藤による八幡宮神社の事例でも、以前は産の穢れ観が厳しく、妊婦の参拝が禁じられていたが、時代の変遷にともない、現在では八幡宮神社の境内に安産祈願とともに初宮参りの際に妊婦や産婦の参拝が認められるようになったことが報告されている。この事例は、出産を穢れとみる考え方が衰退したことを示唆している。こうした動きは一部の地域に限定してみられるものだろうか。本論でも、産育儀礼をおこなう際に赤子の母親の参拝が禁じられることがあるのかどうか、また、産育の儀礼や習慣に穢れの観念がどのように関わっているのかを検討する。

3. 調査地域と対象事例

先に言及した先行研究のうち、田口の研究は東京都内の

6　ヘイシ除けとは、原因不明の熱が出たり、弱い子が生まれたり、夜泣きをしたりすることを意味することが主述され、ヘイシにかかるのは、赤子だけではなく、親であることもある。ヘイシのなかには親ヘイシと子ヘイシといって、親が死ぬもしくは赤子が死ぬ事態になっているものである。神社の神主や仏閣の僧侶により、ヘイシ除けの祈祷がなされている。

7　「コンガラ様」とは、岡山県の備前地方で巫女のことを意味する。呼び名は「コンガラさん」であり、ヘイシ除けの祈祷は、この神の宗教活動の一つになっていると考える。

地域を対象としたものであり（田口 2010: 100-110）、内藤の二つの論文は長崎県の対馬の地域を中心にしたものである（内藤 1998: 39-48; 1999: 93-99）。一方、中島の研究は長崎県の多摩川流域の社寺（中島 1993: 24-25）、福尾の研究は岡山県下の神社をそれぞれ対象としている（福尾 1994: 1-8）。本稿は、愛知県名古屋市の熱田区の熱田神宮の事例を取り上げる。熱田神宮はもともと安産祈願や他の産育儀礼に特に関係のある神社ではなかったものの、近年では安産祈願の場としても人気が高い。熱田神宮は名古屋という大都市に位置し、三大神宮の一つとして全国的な知名度を誇り、もとより参拝客も多い。これらの点で、熱田神宮の事例を報告する本稿は、先に言及した先行研究にみられる問題意識を共有しつつ、今後の比較検討をより発展させるうえで一定の貢献を果たせるものと考える。

じつは、産育習俗研究の観点からみても、愛知県名古屋市の事例については知見が乏しいといわざるを得ない。第二次世界大戦の前に日本全国各地の産育習俗を考察するために、現地調査がおこなわれ、その調査の成果として、日本民俗学の貴重な資料とみなされる『日本産育習俗資料集成』が出版されている。戦前の愛知県の知多郡、額田郡、中島郡、南設楽郡、北設楽郡、海部郡、丹羽郡などの地域ごとの妊娠習俗、安産の習俗、腹帯祝いの俗信、妊婦に課せられるタブーなどについては報告されているが、名古屋市の産育にまつわる儀礼や信仰、安産祈願に関する神社・仏閣の事例については記述がみられない（恩賜財団母子愛育会（編）1975）。本稿が報告する事例は、資料的にも新たな知見をもたらすものと考える。

4. 本研究の目的

本稿は、熱田神宮における安産祈願の現状、腹帯の習俗の実態と動向、安産のお守り、産後の初宮参り・命名式の習俗、産育儀礼における穢れ観、熱田神宮と安産祈願並びに腹帯・初宮参り・命名式などの産育儀礼との関係とその歴史的変遷などについて報告する。先に言及した先行研究で示された問題意識をふまえつつ、特に現代における安産祈願の信仰的側面、宗教的背景を検討する手がかりを提供することを目的としている。

本研究で用いる資料は、主に 2018 年 12 月 12 日、12 月 18 日、12 月 28 日に熱田神宮の現宮掌の宮本氏並びに他の神職を対象とした聞き取り調査により得られたものである。聞き取り調査の際には、その都度、許可を得て発言内容を全て録音した。聞き取り調査の他に、筆者は何回も調査地域に行き、安産祈願並びに初宮参りの際に、熱田神宮の境内にあるどの摂社や末社が参拝者により参拝されるのか、どのような腹帯が授与されるのか、安産祈願の申込書、安産のお守りはどのようなものなのかといった点を中心に直接観察をおこなった。

Ⅲ 熱田神宮の事例
――安産祈願の習俗

愛知県名古屋市の熱田区にある熱田神宮は、参拝者により古くから「熱田さん」と呼ばれて親しまれ、日本全国から「心のふるさと」として篤く崇敬を集めているという（篠田 1968）。この神宮では主として「熱田大神」[8] が祀られ、境内内に本宮の他に別宮が一、摂社が十二、末社が三十一ほどあり、創建については草薙神剣に由来し、景行天皇（71 年～ 130 年頃）の時代に創建されたと推測されている。熱田神宮ではさまざまな祈祷並びに安産祈願がなされ、安産祈願の習俗については、三重県出身の現宮掌の宮本氏の話によれば、熱田神宮の境内に末社の一つである楠御前社（クスノミマエシャ）があり、そこに「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という国産みの夫婦神を象徴する二柱が祀られることから、この末社が人間の出産に深く関係を持っているという。楠御前社の特徴とは、普通の神社のような建物の形をせずに、「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」が宿ると信仰される楠の木だけが瑞垣内に現存しているという。2018 年 12 月 12 日の午前 11 時半頃、宮本氏に対して聞き取り調査をおこなった後、宮本氏は楠御前社の現場に筆者を案内し、安産祈願で来ている妊婦はどのような順序で楠御前社の二柱を拝むのかを詳細に説明してくれた。楠御前社にあった看板によれば、祀られる祭神は「お楠さま」（オクスサマ）と呼ばれ、出産や縁結び、並びに病気平癒の神として信仰され、また子安神とも呼ばれるということである。楠御前社の由来や妊婦がいつ頃から楠御前社を訪れ始めたのかを尋ねてみると、宮本氏や他の神職はその件に関しては詳しくは知らないと語った。そし

8 「熱田大神」とは、熱田神宮の本宮の祭神であり「アツタオオカミ」と呼ばれ、三種の神器の一つで、草薙剣の神霊に関連し、天照大神と同一神だと考えられる。

て、熱田神宮に関連する文献資料を見ても、楠御前社という神聖な場所がいつ頃から安産祈願の対象になったのか、安産祈願の始まりのきっかけなどについて何も書かれていない。

熱田神宮の周辺に住んでいる妊婦は、妊娠中になぜ安産祈願の際に、熱田神宮の本宮で祀られている祭神の「熱田大神」を拝むことが習俗になっているのか、楠の木はいったいどのような意味を象徴するのか、どのようなしきたりで安産の祈祷を熱田神宮でおこなうのかといった点を尋ねてみると、宮本氏は、「安産は、やはりお腹の中に授かっているものなので、その子が無事に成長して生まれるように母としての不安があるのは自然なことで、安産祈願を求めて来る妊婦は、熱田神宮の本宮に参拝することにより、複合の利益を得ていると思われる。「熱田大神」とともに、昔から篤く信仰されてきた楠御前社の楠の木に宿る「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という夫婦神を拝むことで、両方のカミサマの加護を受けると信じられている」という。宮本氏はさらに、「具体的には、熱田大神は剣のカミサマなので、霊的な力を持ち、その力により悪いものを断ち切ることができると信じられている。剣の霊的な力により、出産に対して邪魔するようなものを断ち切る意味合いもあるので、安産祈願を求めている参拝者が熱田神宮を選択していると思われる。祭神のアツタオオカミには剣神・戦神・太陽神などの複合的な神格があるので、熱田神宮に来る妊婦の数が多くなった」と語った。また、楠の木が象徴する意味については、「楠の木の生命の循環は、伸びてから、種を落として新しい木がどんどん伸びていくため、生命の再生のことを象徴している」と語った。宮本氏や他の神職の語るところによれば、楠の木に宿る安産の神が楠御前社にあっても、楠御前社は普通のお社の形を持っていないので、安産祈願は実際に熱田神宮の隣にある神楽殿でおこなわれているという。妊婦がまず神楽殿で安産の祈祷を済ませ、祈祷が終わったら安産のお守り、腹帯、お菓子、鳥居の形をした祈願絵馬などが妊婦に授与される。その後に、楠御前社に参拝する妊婦は、安産の願いごとや無事に赤子が授かりたいといった願いごとを記入した鳥居の形の絵馬を木材の二柱の所に供え、二礼二拍手をして無事に赤子が生まれるようにオクスサマにお願いして終わるという。

写真 1. 熱田神宮の本宮
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 2. 神楽殿
（2018 年 12 月筆者撮影）

筆者が楠御前社に置いてあった鳥居の絵馬を直接観察したところ、安産の願いごと・子宝に恵まれる願いごとが記入された絵馬が数多くみられた他、星形の絵馬や四角形の絵馬が隣の絵馬掛けに奉納されていることを確認した。安産に関係がある絵馬にどのようなメッセージが書かれていたのか、その祈願絵馬の内容はいったいどういう意味を持っているのかを検討するために、筆者は 2018 年 12 月 18 日、12 月 28 日、1 月 7 日に繰り返し楠御前社を訪問し、願いごとの内容を分析することを目的として祈願絵馬を全て写真撮影した。その撮影した絵馬のなかには、安産祈願とともに病気平癒の願いごとを記入した絵馬が多く混ざっていたが、安産の願いごとのほうが多数を占めていた。安産になるように主に「大きな子どもを授かりますように」、「元気な子供を授かれますように」、「赤ちゃんが無事に産まれますように」という願いごとが書かれ、絵馬には願いごと以外に、参拝者の名前、日付けが記入されていた。みたところによると、

ほとんどの絵馬が平成三十年頃に書かれたものであった。

宮本氏の語るところによれば、熱田神宮の場合は、毎日安産祈願がなされているが、特に妊娠５カ月目の戌の日に安産祈願を望む人が多いという。楠御前社の「お楠さま」と安産の象徴的な動物だと思われる犬と直接／間接的な関係はなくても、昔から戌の日は日本社会において、産育儀礼をおこなうために縁起の良い日とされてきたため、現在でも、妊娠５カ月目の戌の日に祈祷を望む妊婦が多い。現在、安産の祈祷が終わった後、授与される安産のお守りは「安産守り」と呼ばれ、種類はピンク色一種類で、熱田神宮の神紋である桐竹[9]が描かれている。女性の多くはピンク色が好きという考えを反映しているものと考えられる。安産のお守り袋の外側には「軽いお産であります様に母子ともに元気ですこやかであります様にと祈願致しております」というメッセージが書かれ、赤子が無事に生まれた後、日本の他の神社と同様にここでも初宮参りの際に、安産のお守りを返却する仕組みになっているということである。

Ⅳ 熱田神宮における腹帯の習俗

宮本氏の話によれば、熱田神宮では、妊婦に腹帯として白い色の伝統的な晒しが授与されている。その晒しは「はらおび」又は「ふくたい」と呼ばれ、日本の神道では白が最も清浄な色だと考えられるので白になっているという。他の神社と比較すると熱田神宮では、現代的なコルセットもしくはマタニティベルト式のものは授与されないが、伝統的な晒しを希望しない人は、お祓いのために簡単なベルトタイプのものを自分自身で準備して持参してもかまわないという。また、現在では、腹帯自体には何も書かれていないが、昔は晒しに朱印を押していたことがあったという。晒しを洗うと滲んでしまう可能性が高いため、その慣習はすでになくなっている。以前は、熱田神宮の晒しの外袋に筆で「熱田神宮安産腹

写真 3. 安産祈願の申し込み書
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 4. 安産守
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 5. 楠御前社
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 6. 鳥居の形をした絵馬
（2018 年 12 月筆者撮影）

9　桐竹とは、日本の神話によれば、桐という植物にカミサマが宿り、竹という植物に生命力があってまっすぐ育って若々しい力を所有していると思われている。また、鳳凰という鳥はその竹の若い芽を食べると生命力にあふれると信仰される。

帯」という言葉が書かれていたが、現在では、その代わりに印刷されるようになったという。宮本氏の話によれば、安産祈願の際に現在の妊婦が持参する現代風のベルト式のものとともに熱田神宮から貰う伝統的な晒しを一緒に膝の上において、お祓いを受けている事例が多くみられるという。安産と腹帯を望む参拝者の数について尋ねると、毎年安産祈願と腹帯を希望する参拝者はおよそ五千人であり、安産のお守りだけを希望する参拝者はおよそ六千人ということである。

写真 7. 楠御前社の看板
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 8. 楠御前社の右側の絵馬掛け
（2018 年 12 月筆者撮影）

V 熱田神宮における初宮参りと命名式の習俗

宮本氏の話によれば、新生児が無事に生まれた後、熱田神宮では、安産のお礼参り並びに赤子の初宮参りが同時期になされているという。また、初宮参りを希望する人々は赤子の健やかな成長を願って、熱田神宮の隣にある神楽殿で祈祷する。筆者がインターネットで検索してみたところ、熱田神宮のホームページには、初宮参りの祈祷は毎日午前八時半から午後四時まで対応可能との情報が掲載されていた。参拝者は安産祈願並びに初宮参りの際に、祈願ごとに決まっている申込書に必要な情報を記入し、授与所にいる神職や係員に自分の望みの初穂料とその申込書を渡し、祈祷のために神楽殿に入る。

次の熱田神宮の命名式については、赤子の名付けに関する伝統的な信仰が昔から現在まで受け継がれている。宮本氏の話および熱田神宮のホームページに書かれた情報によれば、参拝者は生まれた赤子に名前を付けるために、熱田神宮の南の鳥居をくぐって左側にある熱田神宮の境内の摂社の一つである上知我麻神社[10]を訪れるという。上知我麻神社（カミチカマジンジャ）の創建年や創建者は不明であり、祀られる祭神は「乎止與命」[11]と呼ばれ、祭神は知恵を授ける学問の神と信仰されてきた。名付けは具体的には、赤子が男の子なら黒い色の筒で、女の子なら赤い色の筒でおみくじを引くことで、名前を決めるための漢字の一文字を受け取る。これは、祭神からの神託により赤子が漢字を授かったことを意味する。こうして祭神に祈祷をすることにより、赤子は名前に限らず、幅広い知恵にも恵まれると信じられている。

熱田神宮における命名式の特徴は、上知我麻神社でしか命名の祈祷がなされていないということである。宮本氏の話によれば、上知我麻神社では毎日命名の祈祷がなされるが、赤子の母親は出血の穢れのために参拝できず、その代わりに、赤子の父親か父方の祖父や祖母が赤子を抱いて訪れ、祈祷の際に神職にいつ頃赤子が生まれたのかを報告しているという。熱田神宮のホームページによれば、命名式とは、赤子の生命は神から賜ったものであり、神から名付けのために漢字の一文字を授けてもらうことで、赤子は常に神からの祝福を受けるご利益を得ることができるという。また、他の神職の話によれば、漢字の一文字を授かった後、漢字をどう組み合わせて名前を決めるかは参拝者の自由である。命名の祈祷を熱田神宮の神楽殿でおこなわず、上知我麻神社のみに

10　摂社の上知我麻神社では祀られる祭神が、知恵や大学の入学試験に合格するような祈願の他に、赤子の命名式の祈祷がなされる。
11　「乎止與命」とは、「オトヨノミコト」と呼ばれ、上知我麻神社では祀られる祭神が、日本武尊の死後に熱田に草薙神剣を祀った「宮簀媛命」（ミヤズヒメノミコト）の父だと思われる。

限っていることは、命名式の伝統的な習俗になっているという。さらに、命名式に関わる伝統的な信仰の一つに、祈祷により赤子に名前を付けるとその子は熱田神宮の名氏子になることがある。このように祈祷をして名前を受けた名氏子のために、熱田神宮では毎年 11 月 15 日に、神に対して今までの無事成育を感謝することを目的として名氏子祭[12]が開催される。このことから、現在も熱田神宮における命名式の伝統な習俗がそのまま継続していることが理解される。

写真 9. 上知我麻神社
（2018 年 12 月筆者撮影）

写真 10. 安産腹帯
（2018 年 12 月筆者撮影）

Ⅵ 考 察

愛知県名古屋市の熱田神宮の事例から、名古屋市における、安産祈願、腹帯、初宮参り、命名式などの習俗の現状と傾向を報告した。熱田神宮の場合、「熱田大神」が複合的な神格を持っていると信じられるためか、産育儀礼をおこなう参拝者の人数はかなり多い。安産祈願の場合、安産の神として「お楠さま」が安産の利益をもたらすとされ、「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」の夫婦神に対する信仰もみられた。儀礼ごとに熱田神宮の境内にある決まった末社や摂社が参詣され、安産祈願には楠御前社、初宮参りには熱田神宮の本宮、命名の祈祷には摂社の上知我麻神社という決まったところへ参拝される傾向が明らかになった。時代の変遷や産婦人科において医療技術が進歩しても、また自宅出産から病院出産が中心になっても、出産で命を落とす可能性が大幅に減少したとはいえない。時代に関わらず、妊婦や家族にとって、子が無事に授かるよう、あるいは胎児が安産であるよう願うのは自然のことであり、現在でも、熱田神宮の楠御前社を訪れる参拝者の例が多くみられ、安産に関係が深いとされる楠御前社の楠の木に宿る「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」に対する妊婦の信仰が続いていることが明確になった。「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という神については、日本の神話[13]によれば、日本列島が作られるように、「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という国産みの夫婦神が数えきれないほどの子を産んでいた説話があることから、楠御前社に参拝すると、その夫婦神にあやかることができると考えられているようである。

名古屋市内の安産祈願や他の産育儀礼の神社として人気を集めている熱田神宮の創建の歴史を辿ると、もともとは、日本の三種の神器の一つである草薙の剣を祀ることの関連で「熱田大神」が崇拝され始めた。本宮で祀られている「熱田大神」がどのような特徴を持っているのか、なぜ安産祈願や初宮参りの際に参拝者が同期に本宮を訪れて「熱田大神」から祝福を望むのか、といった点について検討したところ、具体的には、「熱田大神」の特徴とは剣や戦いの神とされ、この神は草薙剣の霊的な力とともに「天照大神」などの力を持っている神であり、「熱田大神」は複合的な性格を持っ

12　名氏子祭とは　熱田神宮の境内で毎年 11 月 15 日に名氏子ために、名氏子祭が開催される。
13　国生みの夫婦神が数えきれないほどの子を産んで日本列島が作られたという説話がある。

ている神であると思われる。そのために、「熱田大神」を拝むことで、参拝者が複合的な利益を貰い、剣の霊的な力により悪いものを断ち切ることができると信じられており、その複合的な力を受けることを目的として、人々はそれぞれの希望の儀礼により、熱田神宮の境内にある異なる末社や摂社を訪れる際にも、改めて本宮の「熱田大神」を祈る習俗の傾向がみられることが明らかになった。

腹帯については、熱田神宮の場合、現在では、妊婦の腹帯として伝統的な白い色の晒しが授与されている。日常生活の便利さや締め方の簡単さを考慮して、多くの神社では使いやすいコルセットやマタニティベルトを授与していても、熱田神宮では日本の産育儀礼の伝統的な習俗を守り続けるために、神道では穢れのないことを示す白い色の晒しを授与していることも明確になった。冒頭で言及した八幡宮神社の場合、安産祈願の際に伝統的な晒しよりもパンツ型の衣類が腹帯の代表品になったことで、神社側から現代風のものが妊婦に渡される仕組みになっている。また、中島による報告では、妊婦が安産祈願の際に自分自身で腹帯用の晒しを持ってきて護摩を焚いてもらう仕組みになっていた（中島 1993: 24-25）。熱田神宮の場合、安産祈願の際に、妊婦が自分の好みのデザインの腹帯を持ってきてお祓いを受けることはできるが、神社側から今でも伝統的な白い色の晒しが授与されることが明らかになった。しかし、安産祈願の時期についていうと、先行研究で取り上げられたほとんどの社寺の事例と同様に熱田神宮でも安産祈願とともに腹帯の儀礼が同時になされ、特に安定期である妊娠５カ月目の戌の日に安産祈願をするために参拝者が来る傾向にあることが見てとれた。

さらに、命名式については、以前と全く同じように熱田神宮から新生児の名付けのために漢字の一文字を授かる観念が根強くみられ、赤子は神の恵みで授かり賜ったものなので、名前を決める際にも上知我麻神社を訪れ、祭神の「乎止與命」から貰うと意義があるという信仰が継続していることが明らかになった。また、熱田神宮の産育儀礼における穢れ観については、以前と同様に現在でも、命名式の際に赤子の母親ではなく、父方の祖父母が赤子を抱きながら祈祷を受ける習俗が続いている。その原因として、熱田神宮の神職たちが出血を穢れ観につなげたり、祈祷に赤子の母親の参拝を禁じたりすることがあげられる。冒頭で紹介した八幡宮神社の事例と比較すると、八幡宮の場合は産の穢れの概念がなくなりつつあるのに対して、熱田神宮の場合は、現在でも命名式の祈祷の際に産の穢れ観がみられる。日本三大の神社[14]として篤く崇敬を集めている熱田神社を司る神職が、産育儀礼において穢れの概念を重視していることによるのかもしれない。

本稿では、熱田神宮の本宮で祀られる「熱田大神」が日本神話における三種の神器の一つである剣との関連でどのように創建されたのか、熱田神宮がいつ頃から安産祈願、初宮参り、命名式の祈祷をおこなう場所になったのかは明確な情報を得ることはできなかった。中島（中島 1993: 24-25）と福尾（福尾 1994: 1-8）の安産祈願に関する研究によれば、長崎県の多摩川流域の上流地区の尾崎観音、中流地区の東光寺安産薬師や大国魂神社、岡山県瀬戸内市牛窓町の紺浦の地域では、もともとは安産祈願の目的で参詣されることはなく、むしろ厄除けやヘイシ除けの祈祷と強い関係を持っていたが、近年になって祈願者の願いを考慮し、安産祈願の対象の社寺になったことが報告されている。現段階では、その経緯については明らかではないが、熱田神宮の場合も、古くは安産祈願や他の産育儀礼とは直接な関係がなかった神社が、近年では安産祈願をはじめとする産育儀礼を希望する参拝者の人気を集めるようになった点で共通している。このことを踏まえて、安産祈願や産育儀礼のために熱田神宮が参詣されるようになったのは近年であると推察することも可能だろう。これらの理由をさらに比較検討することにより、現代の産育儀礼と神社仏閣、信仰と宗教的実践との関係を明らかにすることができると考える。

Ⅶ 結論と今後の課題

本稿では、熱田神宮の事例をとおして、妊婦はお腹のなかにいる胎児が無事に生まれるように戌の日に安産祈願をするために、熱田神宮に参拝する動向が続いていることが明らかになった。また、安産祈願と関連する先行研究ですでに報告された内容と同様に、熱田神宮の場合も、現在妊婦の

14　日本の古典歴史書である『日本書記』に記された日本三大神宮では、「伊勢神宮」「出雲大神宮」「石上神宮」の名が言及されている。

多くが、最もふさわしい安定期の時期だと見なされる妊娠5カ月頃に入ると、縁起の良い日とされる戌の日を選択し、胎児の安産を願い、熱田神宮に参拝することを実践していることもわかった。さらに、安産祈願の際に、熱田神宮では現在も伝統的な白い色の晒しが妊婦に授与され、命名式の祈祷の際に、赤子の母親の出血のために、赤子の母親の参拝を禁じている動向も明らかになった。田口（田口 2011: 107-129）や内藤（内藤 1999: 93-99）の研究と比較すると、パンツ型や腹巻のような簡単なものではなく、熱田神宮では今も白い色の晒しが妊婦に授与されている。安産祈願のために熱田神宮を訪れる参拝者は、「イザナギノミコト」と「イザナミノミコト」という国産みの夫婦神が宿っていると深く信じており、さまざまな産育儀礼をおこなうために熱田神宮を訪れる妊婦や産婦の数はかなり多いと神社関係者は認識している。そのうえで、命名の祈祷の際に、神から貰った漢字の一文字を赤子に付けることにより、現在の母親は赤子が神から加護や祝福を受けるように願いが込められている動向が続いているようである。さらに、本稿では、現代の妊婦が鳥居の形をした絵馬にどのような願い事を記入しているのかという点から、安産といういつの時代も変わらない妊婦の願いを読み取ることができた。願いごとが神に届くようにとの強い意志も感じられる。

最後に、時代の変遷や生活の変化があっても、宗教的な施設である神社は人間の人生儀礼、つまり産育儀礼に大事な役割を果たし続けていると考えられる。本稿では、熱田神宮の創建の歴史が直接／間接に産育儀礼と関係はなくても、熱田神宮の本宮で祀られる「熱田大神」が複合的な神格を持っていると篤く信じられることで、熱田神宮が多くの人々によって参詣され、出産前後の節目節目におこなわれる安産祈願・腹帯・命名式・初宮参りというさまざまな産育儀礼に大事な役割を果たし続けていることを明らかにした。時代の変遷や祈願者の願いにより、熱田神宮が「熱田大神」に対する祈祷をはじめ、他の各種祈祷をおこなう神社として人気を集め始めたと推測される。今回は、熱田神宮の事例だけを取り上げたが、愛知県名古屋市の安産祈願・産育儀礼に関わる他の神社・仏閣でなされる儀礼にも熱田神宮と同じような動向がみられると断定することはできない。今後は、名古屋市の他の神社・仏閣の事例を取り上げ、比較検討する必要があるだろう。それにより、現代日本の産育儀礼の実態と動向をより総合的に把握することが可能になるだろう。さらに、今回は、熱田神宮で実施された聞き取り調査とともに看板や熱田神宮のホームページで紹介された情報にもとづいて、主に安産祈願・腹帯・初宮参り・命名式の習俗や祈祷の現状と傾向を、愛知県名古屋市という都市部に残されている民俗信仰と、宗教的な儀礼の実態と動向を報告した。しかし、今回の聞き取り調査では、安産祈願並びに初宮参りや命名式がいつ頃から熱田神宮でおこなわれ始めたのか、楠御前社の創建の詳細な歴史、名氏子の慣行の始まりの契機がいかなるものであったのかを確認することができなかった。今後は、熱田神宮の宮司や他の神職に対しても聞き取り調査をおこない、詳細な情報を得たい。さらに、なぜ名古屋市の参拝者が産育儀礼をおこなうために熱田神社を訪れているのか、参拝者の視点から検討することもできなかったので、今後の課題にしたい。今後は、妊婦や産婦の意見を尋ねるために、熱田神宮を訪れる妊婦や産婦に対してインフォーマルの聞き取り調査やアンケート調査をおこないたい。熱田神宮から得られた資料が今後の安産祈願の実態と動向を見極める端緒となれば幸いである。

謝辞

本論文を終えるにあたり、特に聞き取り調査にご協力いただいた熱田神宮の宮掌の宮本氏ならびに他の神職や受付の方々に対して、厚く御礼を申し上げる。聞き取り調査の際には、神社ごとの貴重なお話の他、楠御前社を案内、さらに、腹帯・安産のお守り・鳥居の祈願絵馬の撮影を許可していただいたことに対して、心から感謝申し上げる。また本稿の執筆にあたっては、査読者から多くのご指摘、貴重なご助言をいただいた。記して心より感謝の意をお伝えしたい。

参照文献

恩賜財団母子愛育会（編）
1975　『日本産育習俗資料集成』第一法規出版。

篠田　康雄
1968　『熱田神宮』学生社。

新谷　尚紀・波平　恵美子・湯川　洋司（編）
2003　『暮らしの中の民俗学③一生』吉川弘文館。

田口　祐子
2010　「安産祈願の実態と動向――新宿区中井の御

霊神社の事例から」『女性と経験』35: 100-110。
2011　「現代における安産祈願の実態とその背景」『神道宗教』220-221: 107-129。

内藤　美奈
1998　「対馬の産育習俗（1）右近様――厳原町の安産祈願」『女性と経験』23: 39-48。
1999　「対馬の産育習俗（2）八幡宮神社の腹帯祝いと初参り」『女性と経験』24: 93-99。

中島　恵美子
1993　「多摩川流域の安産祈願」『西郊民俗学』142: 24-25。

福尾　美夜
1994　「安産祈願及びコンガラ様」『女性と経験』19: 1-8

（参照ウェブサイト）
熱田神宮ホームページ
https://www.atsutajingu.or.jp/jingu/